

氏名(本籍)	あ だち たく ろう 足立拓朗(鳥取県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第2565号
学位授与年月日	平成23年11月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	鉄器時代西アジアの物質文化の変容 －レヴァントとイランから見た新アッシリア帝国成立の背景－

主査	筑波大学教授	博士(文学)	常木 晃
副査	筑波大学教授	Ph.D.	山田 重郎
副査	筑波大学准教授	Ph.D.	三宅 裕
副査	慶應義塾大学教授	Ph.D.	杉本 智俊

論文の内容の要旨

本論文は、4章と補遺からなり、西アジア最初の帝国である新アッシリア帝国成立の背景を、周縁地域の物質文化の分析に基づいて説明しようと試みている。

1章「西アジア鉄器時代からの問題提起」では、本論文の目的と研究方法、新アッシリア帝国の定義が述べられている。本論文の最大の特徴は、新アッシリア帝国にとって「周縁地域」であるレヴァント地方やイラン地方から得られた物質文化資料群を用いて新アッシリア帝国成立の背景を考察することにある。本章では新アッシリアの領土範囲、地方行政システム、捕囚政策、交易などについてこれまでの史資料が整理され、従来の見解に従い帝国の成立を前8世紀後半のティグラト・ピレセル3世の治世(前744～前727年頃)と定義している。

2章「レヴァント鉄器時代の石製容器・土器の研究」では、レヴァント地方の物質文化の中で日用品と考えられる遺物群が分析される。

2章1節「レヴァント鉄器時代の石製容器の研究」では、鉄器時代に広範に分布する石製容器を三脚鉢、鉢、高坏、四脚鉢に分類し、さらに細分している。このうち重要で特徴的な器形である三脚鉢3類は後期青銅器時代に、高坏は前10世紀頃、鉢2D類は前9世紀末に出現する。その時期は新アッシリア帝国の成立の画期となったティグラト・ピレセル3世の治世以前であり、その後分布を広げたことが明示された。

2章2節「新アッシリア併行期の鉢形土器の研究」では、4種の鉢形土器と新アッシリア帝国拡大の関係が論じられる。従来、外屈口縁鉢と胴部屈曲浅鉢は、新アッシリア系の土器であると考えられていた。しかし詳細な編年研究によって、胴部屈曲浅鉢はレヴァント地方でより古く出現し発展したレヴァント系土器であり、新アッシリアの拡大時期にレヴァント地方からメソポタミア地方に導入された土器と結論づけられた。

2章3節「新アッシリアの拡大とプロト・フィアレ土器の意味」で主題となるプロト・フィアレ土器は「アッシリアン・ボウル」と呼ばれ、新アッシリアの物質文化とみなされてきた。しかし、分析の結果、プロト・フィアレ土器は新アッシリア帝国が成立する前8世紀後半以前から西アジアに普遍的に存在することが明らかになった。各地のプロト・フィアレ土器の製作技法はそれぞれの「在地土器」と同一で、在地の製作技術伝統

を継承しながらプロト・フィアレ土器がそれぞれの地方で生産されていたと考えられた。

2章で分析された日用品の多くは、これまで新アッシリア帝国の成立に伴いレヴァントなどに広がっていった新アッシリア系統の遺物と想定されていた。しかし本章の分析によって、その多くが新アッシリア帝国成立以前にレヴァント地方で成立し、後に新アッシリア帝国に導入されたものであることが明らかにされた。

3章「イラン鉄器時代の金属製武器・土器の研究」では、レヴァント地方とは新アッシリアを挟んで反対側にあたるイラン地方において、日用品とは異なる奢侈品とも言える金属製武器と土器を分析することで、新アッシリアとイランとのかかわりを考察しようとしている。

3章1節「耳形柄頭剣の研究」で取り上げた耳形柄頭剣は、出土例が少なく、その年代を知ることが難しい資料であった。本論文では、ラペット付フランジ式剣と耳形柄頭剣の型式学的な研究により、その年代が考察された。その結果、耳形柄頭剣は前10世紀頃にラペット付フランジ式剣から型式変化し、北西イランで独自に発達し、前8世紀前半頃まで存続したことが明らかにされた。つまり耳形柄頭剣は、新アッシリア帝国の成立直前に廃絶したと結論付けられている。

3章2節「人面装飾柄頭鉄剣の研究」では、人面装飾柄頭鉄剣が西アジアで最古級の鉄剣であり、また人面装飾柄頭鉄剣→円盤状柄頭鉄剣→T字状柄頭フランジ式鉄剣という型式組列が認められることを明らかにした。そして、人面装飾柄頭鉄剣は前12～前9世紀頃に祭器として利用されたと結論付けた。その消失の時期は、耳形柄頭剣の消失とほぼ同時期にあっている。

3章3節「古代イラン青銅製ソケット式斧の系統と衰退」では青銅製ソケット式斧を編年し、管状斧系、挟入斧系、鋌付斧系、三日月形斧系、透かし付斧系の5系統の存在が提示され、最終的な類型として鋌付斧Ⅱ類と三日月形斧Ⅱ類を認定している。両類型とも利器として使用するには刃部の角度が不自然であり、祭器として使用されたと結論付けられている。青銅製ソケット式斧は過剰な装飾と大型化をたどりながら祭器化し、前9世紀末頃に衰退したことが明らかにされた。

3章4節「ババ・ジャンⅢ式彩文土器の研究」では、金属器に続いてイラン鉄器時代の土器が検討されている。前9～前8世紀に西イランに分布するババ・ジャンⅢ式彩文土器の対向三角形文を型式学的に追跡した結果、対向三角形文はルリストーン地域の伝統的な文様であることが明らかにされた。そして、ババ・ジャンⅢ式彩文土器の衰退の時期が前8世紀後半であり、耳形柄頭剣や人面装飾柄頭鉄剣、青銅製ソケット式斧などの祭器が衰退する時期とおおよそ一致していることが提示された。

3章5節「原イラン多神教と嘴形注口土器」では、イランの青銅器時代から鉄器時代に存在する嘴形注口土器の機能が原イラン多神教におけるハオマ祭儀に関連する、という仮説が提示される。この仮説を検証するために、まずアケメネス朝以前の原ゾロアスター教の形成過程をめぐる諸説が整理される。その後、嘴形注口土器の形態分類と編年試案が作成された。その結果、嘴形注口土器は北イラン地方で長期間使用されてきた土器群であることが明らかになり、また前8世紀には使用が激減することが指摘された。そのことから、原イラン多神教のハオマ祭儀も前8世紀頃に行われなくなり、原ゾロアスター教がその時期に受容されたと推定された。

4章「西アジア鉄器時代の物質文化変容と新アッシリア帝国」では、2、3章の分析結果をまとめて、そこから新アッシリア帝国成立の背景について論を進め、結論を導いている。本論文で取り上げた物質文化の変容は、ほぼ前9～前8世紀前半に観察される。この時期は、新アッシリアが帝国として本格的に成立するティグラト・ピレセル3世の治世以前であり、「先帝国期 (pre-imperial phase)」と呼ばれ、いまだ新アッシリアの領土拡張の内容が曖昧な時期である。したがって、これらの物質文化上の変容が、新アッシリア帝国からの物質文化的な影響を受けて起こったものではないことは明らかである。本論文の分析では、むしろ逆に、レヴァント起源の日用品がやがて新アッシリア帝国内に入り込み、そこで変容しつつ受容されていったこと

が明らかになった。また、イラン系の祭儀的な遺物はイランで独自に発達し、新アッシリア帝国に受容されることなく消失していった。

先帝国期に新アッシリアの東西に当たるレヴァントとイランにおいて物質文化が変容した直接的なアクセルレーターは、アッシリア先帝国期のアッシュル・ナツイルパル2世、そしてシャルマネセル3世によるレヴァント地方とイラン地方への軍事遠征であったと筆者は主張する。レヴァントとイランにおける物質文化の変容は、この軍事遠征を契機に起こったそれぞれの地方の反応と、それに対する新アッシリアの対応を示唆しているとする。

レヴァントでは各小国家が連合しつつ新アッシリアの脅威に対抗しようとするも、文化的・経済的には逆に新アッシリアとの連携を深め、レヴァント的要素が新アッシリアの深奥部にまで入り込んでいくことになる。この時期にアラム語は、西アジアを横断する共通語としての地位を確立しているが、レヴァント系の日常品の東方への拡大が、アラム人やアラム語の東方への拡大とほぼ期を一にしていることは、両者間の強い連関を示唆する。

イラン高原ではメディアを中心に、やはり新アッシリアの軍事遠征に対抗するための戦略が模索された。しかし彼らの関心は、文化的・経済的な発展を優先するのではなく、政治的・軍事的な共同体の生き残りにあった。そのために共同体を支える理念として新興の原ゾロアスター教を採用した。原イラン多神教の祭儀に関連すると考えられるさまざまな祭器が衰退していく様相は、西方からの軍事的脅威に対して、原イラン多神教にみられる旧態依然とした戦士の男性結社を新たな理念のもとに新しい軍事組織として再編していく過程を指し示しているものと考えられる。

本論文の結論として、レヴァント系の日常的な物質文化の広範な伝播とイラン系の祭祀的物質文化の消失という二面性が、新アッシリア帝国成立に先立つ先帝国期にみられることを指摘している。そこから示唆されたレヴァントとイランの戦略は、新アッシリア帝国期とその後に至るそれぞれの地域での基本的な国家の在り方を説明する。また、征服先の文化や経済を積極的に取り込むが、国家祭祀などは決して受け入れない新アッシリア帝国そのものの国の成り立ちや在り方をも指し示している。

なお補遺は、2章3節で扱ったプロト・フィアレ土器がイランに伝播してから成立したフィアレ土器を含む、バルティア期の精製土器についての研究である。

審 査 の 結 果 の 要 旨

新アッシリア帝国の拡張過程の研究にあたって、本論文では周縁のレヴァントとイランにおいて新アッシリア帝国成立以前からの物質文化の変容を追跡するという分析方法が採られている。従来の文献史料から描かれた古代帝国の成立史に対する、全く異なる角度からの視座であり、ユニークで野心的な試みと言える。筆者自身による遺物の観察と詳細な編年に基づいて論文が組み立てられていることは、本論文の信頼性を高めている。ただし、物質文化の分析に基づいて宗教的変化や軍事組織の再編までをも論じている点など、やや強引ともいえる解釈がみられる。こうした論点には、文献史料などからのさらなる補強が必要であろう。とはいえ、新アッシリア先帝国期にレヴァント系日常品の広範な伝播とイラン系の祭器の消失が見られることを指摘した点は本論文の最大の成果であり、両地方の国家の性格の違いをよく説明するとともに、それらの中心に位置した新アッシリア帝国の成り立ちを考える際の新たな視座を提供している。古代帝国研究の進展に大きく寄与するものと言えよう。

平成23年9月30日、人文社会科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学学位論文審査等実施細則」第10条(3)に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全

員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。